東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

道徳性育成の基盤：幼児期の心情を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1987-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/693

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

道徳性育成の基盤

—幼児期の心情を中心に—

岡田精一

目次

1．道徳性の萌芽期
2．幼児期の未分化性
3．道徳性育成にあたって
(1) 「しつけ」について
(2) 基盤としての情緒性
(3) 信頼と権威
(4) 自発性の尊重
4．他律道徳から自律道徳へ

1. 道徳性の萌芽期

幼児期は俗に「三つ子の魂」といわれるように，人格形成の基盤となる時期であり，道徳性萌芽の時期でもある。道徳性は，本来，可能性として人間に備わっているものである。しかし，幼児期前の乳児期は「無道徳期」注(1)などと言われるように，道徳性の芽は顕われていない。道徳性は，自他を認識する社会性が出てきて初めて姿を現わすものだからである。他人を意識すること自体が不可能な乳児期に，道徳性が芽生えないのは当然で，これを「不道徳」といわず「無道徳」という意味はそこにある。この場合，「無」とは，どこまでも現象としての「無」であり，可能性としての「無」ではない。ただいかに乳児が，可能性として道徳性を潜めているとしても，狼に育てられれば狼に似て人間性は埋もれてしまうように注(2)，乳幼児期の環境如何は人格を決定する重要な鍵を握っているのである。

道徳性は，離乳が完成した1才半ごろ，歩行や片言が始まって社会性が発達してくるとともに兆候を見せてくる。先ず周囲の大人，特に母親との交渉を通し，情緒的なものを媒介として

大人のもつ価値規範が伝達される。それが幼児期における道徳性の萌芽を促すのである。脳の神経細胞のソフトな配線が整えられるのもこの幼児期に始まる「4才から10才ごろ」注(3) の間でこうした発達に親の育て方が大きくかかわっていることはいうまでもない。

幼児期即ち，1才ないし1才半ごろから6才の学齢に達するまでの時期の成長は，親をして，その知識・技能 すべてをこの潮に乗せて 伸ばしてやりたいと 夢みさせるほど顕著 なものである。しかし，どの方面に伸ばすにしろ，全人的発達の上に考えられなければならない。その無策・失敗が，後年に及ぼす影響を考えれば，この期の道徳性育成は何にも増して優先されるものであろう。

幼児期は，全人的発達の土台となる道徳性の萌芽期である。この意味から，私はここで，各方面に顕著なこの期の発達の中から，特に道徳性の育成を考えてみたい。そして今回はそれを情緒性の面から捉えてみようと思う。幼児の知能は「情緒よりやゝ遅れて発達する」注(4) という点からも，幼児の「情緒は精神生活の中心を形作る」注(5) という点からも，三つ子の魂とよばれる人格形成は，大局的には情緒性を基盤としてすすめられると思われるからである。

2. 幼児期の未分化性

道徳性の育成，発達を考えるに当たっては，この期の身体的，社会的，知的，心理的発達との関連を個々的に研究することも必要だが，先ず全体に係る脳の発達に着目してみたい。時実利彦氏の研究によると，「生れたばかりの赤ん坊の約400gの脳は，身体のどの部分よりも，ずっとはやい速度で発達する。6か月で，生れたときの重さの2倍になり，7，8才で，大人の重さの90%に達する。そのあとはゆっくり大きくなってゆき，20才前後で完成する」注(6) といわれている。つまり，幼児は経験の裏付けこそ乏しいが，すでに大人に近い頭脳の発達を遂げつつあるということに注目したいのである。このことは，人格形成においても，その一生に係わる屋台骨が幼児期にすでに構築されているということを意味するからである。

また，始語期は歩行の安定する一才半ごろから始まり，3才ないし4才には完成するといわれているが，この幼児の語彙修得能力も，幼児の急速な精神的能力の発達を証明するものである。これについてケアリーは次のようにいっている。

「6才児は程度の差はあれ，約1万4千語を修得しているとされる。このためには，子どもはしゃべり始めた時から6才の誕生日になるまでに，毎日新しいことばを9語ずつ学習する必要がある。これは実に著しい進歩である。……それほど早く語彙を学習するためには，なんらかの分類能力をもっていなければならない。」それにより，「子どもは新しいことばを心の中の辞書に入れ，その文法的および意味的特徴を表象するのに，1回またはほんの数回の経験で十分なのである」注(7) と。道徳性の育成は，幼児のこうした急速な生理的能力の発達と，たくましい精神的能力の発達をもって，社会との接触を始めるところに期待されるのである。

ところが，幼児がこれだけの有能性をもちながら，一面実に頼りない存在で，大人の保護を必要としているということは，生活経験の乏しさと相俟って，あらゆる面で次時期へ向かっての成長過程にあり，山下俊郎氏の言うように幼児の「未分化性の状態」にあるからに違いない。幼児の心情を考えるには，常にこの「未分化」ということを忘れてはならない。一般に発達とは，未分化の状態から分化した状態へと変化することだといわれているが，山下氏はこれを「さきになっていろんなものへと発展してゆくべきものが，まだ一緒にゴタゴタになって混沌としている状態」注(8)だとわかり易く説明している。そして，さらに「幼児の心理の根本的な特徴――情緒性，興味性，自己中心性，具体性――といわれる4つの特性も，これをまとめて考えると，幼児の未分化性ということに帰着する」注(9)と言及している。たとえば，幼児が嬉しければ跳びはね，いやな時は足をバタバタさせて泣きわめく様子はよく見るところである。大人のように，顔で笑って心で泣くことなどはとてもできない。知性と感情はもちろん，体と心もまだ分化していないのである。

このような状態をピアジェは，「自己中心性」注(10)として心理学の中へ導入し，幼児の心性を特徴づけた。これは自他の分化が進んでいないために，他人の立場に立って自己を見直すことのできない状態をいう。たとえば，自分の父親をよその子が「おじさん」と呼ぶのが納得できないとか，自分の右手左手はわかるが向かい合う相手の左右が理解できないなど，あるいは，自分の体験したことは他人も体験したと思ったり，動物や植物にも人間と同じ感情があると思いこむアニミズムなどがよく例に出される。これらは幼児が，乏しい経験を頼りに周囲を捉えようとするところから起こる現象で，社会性の発達とともにしぜんに克服されてゆくものではある。しかし，教育的にみた場合，この幼児の「自己中心性」という未分化の時期は，頼りなくはあるが可塑性に富んだ時期として，将来への期待がもてる時期でもあるのである。

自己中心性は自我意識の一つの表われであるが，自我意識は，自立する人格形成の基盤を作る意味で重要な要素となっている。この意識は，おもちゃを噛んでも痛くないのに自分の手を噛むと痛い，というようなことから，痛みについて自分というものが意識されてくることから始まる。それは，「生後5，6ヶ月から1才ぐらい」注(11)のころに表われ，自分の持ち物，自分の家族というように，他のものと対立して自分を考えるようになってゆく過程で出てくるのである。道徳的に特に訓練されていない限り，自我意識の出てきた乳幼児は，立ち塞って自我を妨害する他人や社会に激しく対抗し始める。この典型がいわゆる3才前後に表われる反抗期現象であるが，これまた自他未分化ゆえの一現象であり，利己主義，個人主義としてでなく，成長の一過程として捉えられなければならない。

また，こうした幼児の未分化から分化への移行の過程にはいろいろな矛盾がかいまみられることは当然といえよう。たとえば幼児期は，上述のように自己主張の始まる年代であるにもかかわらず，一面では非常に甘えん坊で依存性が強い。また，知的理解が伴わないため，具体的に示されなければ何もわからないように思われるが，一面では自由に想像の翼を広げて直観的に周囲の状況を捉える能力には優れている。こうした相反する二面性こそ，まさに幼児の未分

化性の姿であり，その中で幼児の情緒性も息づいているといえよう。

3. 道徳性育成に当たって

(1) 「しつけ」について

それなら，急速な心身の発達と未分化の過程にあるこの幼児期において，道徳性の育成はどのように考えたらよいのだろうか。

幼児期は，だれしもいうように家庭で「しつけ」をする時期である。しつけは，人間として生きてゆくための基本的生活習慣を習得させることで，道徳教育の前提といわれる他律的なものであるが，「無道徳期」にあった乳児が道徳に目覚めてゆく過程には，この他律が非常に重要な意味をもつことはいうまでもない。なかでも最も基礎的なものとされている「食事・睡眠・排便・着衣・清潔などのしつけ」表(1) は，個人の身体的成長にも適合し，指導の時機を得たものといえよう。たとえば，箸の持ち方，歯のみがき方などは，早い時期から繰り返すこと

表(1) 基本的習慣の自立標準
(山下俊郎―西本脩)

年　齢	食　事	睡　眠	排　便	着　衣	清　潔
1歳0ヵ月	スプーンの使用 茶わんをもって飲む		排便を知らせる		
1歳6ヵ月			便意を予告		
2歳0ヵ月				ひとりでぬごうとする	
2歳6ヵ月	スプーンと茶わんを両手で使う 食事の挨拶		夜のおむつ不要	靴をはく ひとりできようとする	手を洗う
3歳0ヵ月	はしの使用 大体こぼさぬ				
3歳6ヵ月	完全自立	昼寝の終止	小便自立	靴下をはく パンツをはく	
4歳0ヵ月		ねるときの挨拶	大便自立 夢中そそうをしなくなる	帽子をかぶる 前のボタンをかける 両袖をとおす ひとりでぬぐ	口をゆすぐ、うがい、歯みがき、顔を洗う、鼻をかむ、髪をとかす
4歳6ヵ月		寝まきにきがえる	大便完全自立 (紙の使用)		
5歳0ヵ月				紐を堅結びする	
5歳6ヵ月					
6歳0ヵ月				ひとりで全部きる	

により，何の抵抗もなく身につくものであって，幼いながら生活面で徐々に自立させてゆくということは，自主的人格を形成する土台ともなるものである。幼児に望まれる道徳性として，第一に「個人的な生活習慣の自立」があげられるのはもっともなことである。

と同時に，これと平行して「社会生活のしつけ」たとえば，愛他心，礼儀，自制心，公共心，責任感，協調性などといったことも見落すことのできない大切な要素と考えられる。これもやはり型から教えられることであるが，他人に迷惑をかけることを極力抑え，互いの利害を調整する生活習慣として，これから家族以外に多くの人々と交渉をもとうとする幼児にとって不可欠なものである。

道徳は，社会生活をする上で守らなければならない一種の規制であり，約束ごとである。「すべし」「すべからず」の社会常識を，個人生活，社会生活の上に確立し，生きてゆくための互いの約束ごととして身につけることは，道徳性育成の第一歩なのである。

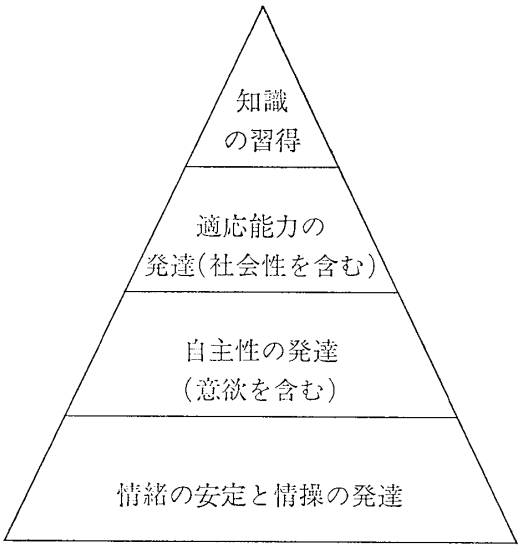
しかし，ここで注意すべきことは，いかに幼児とはいえ，道徳性を単に型として教えることのみに終始してはならないということであろう。道徳の本質は自律であり，他律的に教えられるしつけも，やがてその過程を経て，自律道徳への発揚を期するものである。幼児期から児童期はその橋渡しの時期だという自覚が親には必要なのである。もし，型入れのみに終始するとしたら，それは幼児の内的自己の充実につながらない点で，難関に遭遇すれば忽ち崩れ去る皮層的なものしか育たない。幼児期に「良い子」といわれてきた子が，中学，高校期に突然問題を起こすような例をよく聞くが，これは「型入れ」のみに終始した「しつけ」の好ましからざる結末といえよう。しつけとは生活の型を教えこむと同時に，その心を会得させることなのである。

(2) 基盤としての情緒性

他律的なしつけを自発的な自律道徳へのバネとするためには，幼児の心情への働きかけが必須である。本来自律道徳は，素朴な表現だが知・情・意の三者が相俟って実践へ導かれるものといわれるが，幼児の場合の行動はこの中でも特に情，即ち情緒性と深く結びついている。これについては，平井信義氏も，「人格構造とその発達を考える際，その基底部をなすものは情緒の安定と情操の発達である」注(12) と述べ，それを表(2) のように示している。とかく人間の行動は知識よりも感情に支配されやすい。まして，情緒によって全体がくるまれているような幼児期の教育は，情緒性を無視して考えることはできない。それには，大人が子どもとの心のつながりを大切にすること，子どもの気持ちになって考えることが第一なのである。

子どもとの心のつながり合いは，何といっても母親にまさるものはない。それは乳児が始終母親のあとを追い求めている現象（この母親に対する乳児の結びつき現象は，ボゥルビィによりアタッチメントとよばれて以来，活発に研究が進められている注(13)）でもわかるように，本能的なだけに非常に深い結びつきをしている。しかし，この本能的欲求を充し，情緒の安定を維持することが，人格形成に不可欠なことなので，その意味で母親ほど深く乳幼児の人格形成

表(2)　人格形成の四つの柱



にかわかるものはいないといえる。スピッツ・Rは，養護施設における子どもが，衣食を同じに与えても，母親や看護婦の世話を多く受けた者と放置された者とでは精神的・身体的な発育に大きな開きが出，死亡率にまで影響する注(14)，という結果を発表した。また，ランゲフェルトも，「子どもの発達にはすでに早い時期から，単なる衣食以上のものが必要である。子どもには，安全の体験に対する直接的な欲求があり，この安全の体験は，ただ確実な愛情からのみ生まれる。技術的に完全な，しかし純粋に物的な世話は，不器用で，本質的に不十分な，しかし，暖かく分別のある自制的な世話に及ばない」注(15)とも述べている。

子どもが，好奇心を満たすために冒険したり，他者のいたみや不安を汲むことができるようになるためには，いつも自分が基本的に保護されているという安心感が必要なのである。自分が保護されず危険であると感じている子どもは，自信を失い，いつまでも依存的であったり，あるいは一見，親ばなれが早いように見えながら，真の自主性とは結びつかず，問題行動を生みやすい。母親との結びつきの安定している子どもは，見知らぬ場所であっても母親が傍にいる限り周囲に活発な興味を示し，自由に動き回るが，見知らぬ人物と会えば急いで母親にしがみつく。それに反し，母親との結びつきの不安定な子どもは，母親に関係なく動き回ったり，ぼんやり坐ったままでいたりする。おき去りにされても泣かないし，再会しても顔をそむける。小嶋謙四郎氏はこのような例から，後者にはパーソナリティーの自立に最も基本的な「他者への信頼」が育っていない注(16)ことを指摘している。このような，いわゆるホスピタリズム（施設病）といわれる現象は，単に施設の欠点を指摘しているものではなく，むしろ，一般の保育問題として，母親に対する幼児の依存がいかに情緒の安定に不可欠であるかを示唆するものなのである。「特に二子，三子が生まれ，母親が多忙な時，幼児の心にぽっかりあいた穴は，大人には想像できないほど大きい」注(17)もので，母親の愛はそうした子どもの心の間隙をいつも埋めてやるものであってほしい。時には甘えも，幼児の救助信号の一つとして受容することが

大切と思われる。

ところで，「孤独な母こそ，子どもの不幸の最大の原因」ともいわれるように，幼児の情緒の安定は，先ず母親の情緒の安定からである。そして，母親の情緒が安定しているためには，母親に関わる家族関係即ち，夫，姑，舅などの関係が安定していなければならない。不安定な家族の感情は，直ちに幼児に連鎖反応を起こすものなのである。このように，道徳性育成の基盤が，平凡なことながら人々の情緒の安定にあるということは，道徳性が決して肩肘はったものではなく，人間らしさであるというあかしといえよう。

(3) 信頼と権威

そこでまた先述の「しつけ」について，この情緒性の面から考えてみたい。

道徳性を子どもたちが学びとってゆく過程として畠瀬直子氏は，「試行錯誤により子ども達自身が自然に学びとる場合，直接教示により大人から教えられる場合，教えられるというより，子どもの側から何となく影響を受けてしまう場合」の三つの流れをあげている注(18)。

「親はなくても子は育つ」の諺のように，たしかに放任していても，子どもは試行錯誤である程度道徳性を身につけることはできると思われる。しかし，そこでは，先述のホスピタリズムの例で示したように人格の基盤として最も大切な他者への信頼関係は育たない。豊かな人格はやはり信頼でつながる親子関係の中でこそ正常な発達をみるのである。

そこでこのことを先の「しつけ」(畠瀬氏のことばでいえば直接教示)との関連で考えてみよう。社会生活が円滑にできるようなきまりをしつけるには，人間でも一面において動物に芸をしこむのと同じような過程が必要である。即ち，反復練習に賞罰を加味する方法である。この時期の幼児は，社会性のきまりについては，親が教えなければ何一つ知らない未経験者で，それだけに親への依存心は非常に強い。大人を模倣することによって，幼児は自我を一層確かなものにしようとするのである。自分自身の規範を持たないため，大人の価値判断を絶対的なものと思う時期であるから，まさに「しつけ」の好機といえよう。

しかし，この場合，親に従おうとする幼児の心情について，大人はともすれば何の分別もないのだから命令一下従うのが当然というように幼児を見下した解釈を下し易い。また幼児の方も親の愛情を失うのが恐しくて，仕方なく従っているという状態がよくある。しかし，弱者に対する強者の威圧で「しつけ」を行えば，それは単なる型の強制に止まり，自律道徳の芽生えを促進することにはならないだろう。

「しつけ」もまた，情緒に訴えるものでなければならないのである。幼児が積極的に親に従い，それを模倣しようとするのは，親を敬愛し，親を命のよりどころとしていればこそである。親の愛情を受けたいがために幼児は善行に励む。だからもし親が，幼児からみて信頼や愛情を持ち得ない人間だとしたら，「しつけ」の効果はあまり期待できないのではないだろうか。また，もしこのような気持で善行に励む子の努力を，親が無視するとしたら，幼児はおそらく愛情飢餓から悪へ流れて，親への反発を試みるだろう。叱る場合もそうである。「愛されてい

るからこそ叱られる」という気持が，以心伝心幼児に伝わるからこそ効果があるので，ただ突き放したような叱り方は，幼児の愛情要求を満たさない点で，かえって反抗心を強める結果を招くだろう。

たとえば，1才半ごろから出てくる反抗現象は，「反抗期」として2才から4才にかけて84%注(19)の幼児が通過するといわれているが，それは自他の未分化が原因で，幼児の意志と社会の規範がうまく適合できない成長過程の一現象である。ところが，この現象を，「鉄は熱いうちに」とばかり，親の威厳で極度に厳格に矯正しようとすれば，かえって道徳性育成の土台である信頼の根まで引き抜いてしまう結果になるだろう。特に5，6才の幼児が，自分の責任外で叱られたことに反抗するのを，親が一方的強圧的に罰する誤ちもおかし易いことである。人間である以上，親にも誤解はあるが，ゆきちがいはなるべく早く解きほぐし，信頼の相互関係だけは常に保持しなければならない。

信頼は，恒常性，一貫性の上に生まれるもので，それを支えているのは親ならではの指導理念である。2，3才の幼児は，ただ親の命令，禁止，賞罰のサインに従って行動する。にも係らず，「しつけ」の際与えられるサインが，親の都合や感情で矛盾したり，不明瞭になったりすれば，幼児の抱く不安はすぐ行動を抑制し，「しつけ」を不徹底にさせるばかりか，親への信頼感まで失わせるであろう。

信頼とは，幼児にとって，権威への愛情と尊敬なのである。この場合権威とは，未分化の子どもが支えとしておのずから要求し，また敬愛の情をよせる親の指導理念なのである。指導理念のない愛情には方向の定まらない船と同じく難破する不安が満ちているといえよう。幼児が安心して進めるようゆく手を照らすもの，それが信頼であり権威なのである。「しつけ」の中にはしたくないこともさせ，したいこともさせないという厳然とした自制心への要求がある。また，人生経験も乏しく道徳意識の未発達な幼児の生活の中には，是非の判断も，とっさの決断もできないことが満ち満ちていて，「なぜ」という理窟ぬきで即刻従わせねばならぬことも多い。そうした事態に対応し，幼児を危険や悪から守るためにも，親は子どもにとって信頼と権威の対象でなければならない。

以上，型から入るしつけは，依存性の強い幼児期において効果的ではあるが，ここにおいてさえ，情緒に訴えた信頼の絆が不可欠であること，信頼は理念に支えられた権威への敬愛であることを述べた。さらにいうならば，技術面での工夫が，それぞれの状況に添って具体的に考えられなければならないことはいうまでもないことだ。

(4) 自発性の尊重

道徳の本質が，型でなく心であり，模倣ではなく創造，他律ではなく自律であるということを考えるとき，私は，幼児期の道徳性育成についてはいわゆる「しつけ」のみに促われず，もっと幼児の自発的心理を利用，尊重したいと思う。

幼児期は，動機より結果を大切に思う時期だということは，ピアジェの「幼児における善悪

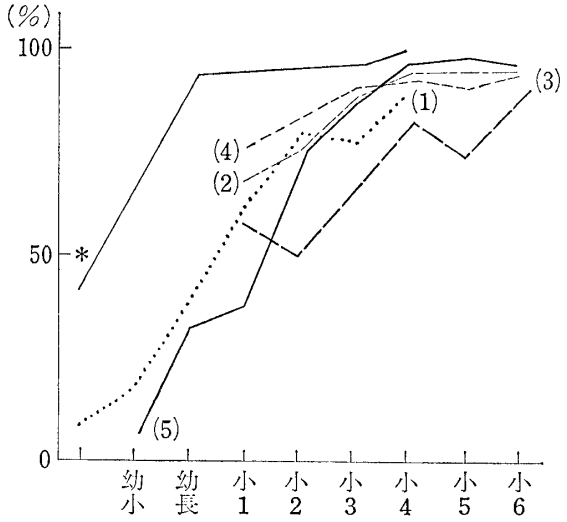
の結果論」などが代表して論証するところであるが，先ずそれについて考えてみたい。

ピアジェの実験によると次のような例がよくあげられる。――A児は，絵がかきたくて父親の留守にインクを使い，テーブルクロスに小さなしみをつけた。B児は，父親があいたままにしていたインクびんのふたをしてあげようとして引っくり返し，テーブルクロスに大きなしみをつけた注(20)――というこの二つの場面を想定させ，どちらが多くの罰を受けるかについて幼児に質問するのである。これに対し，幼児の多くが，大きなしみをつけた方と答えるところから，幼児の道徳に対する考えは，動機ではなく結果によるという結論をピアジェは下した。このことは，彼に限らず安田実氏の実験でも「公園のもみじをとってはいけない理由」表(3) として，5，6才までは，「とってはいけないから」「他人のものだから」という答えが多く，「美しいから」「みなの迷惑となるから」という道徳の本質に関わる答えが少ないことから注(21)，この時期はまだ本質的な道徳性が育っていない時期，動機よりも結果に終始する時期とみているのである。

表(3)　公団のもみじをとってはいけない理由（安田　実）

項目＼年齢	5		6		7		8		9		10		11		12		13	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
(1)他人の物であるから	6	5	15	16	12	17	13	15	12	5	8	9	7	7	9	11	7	4
(2)とってはいけないから	7	5	10	9	7	5	4	4	3	1	3	3		2	9	4	7	1
(3)美しいから			2	3	7	4	9	8	7	14	10	6	3	4	4	10	3	6
(4)公衆の迷惑となるから							3	3	8	7	7	12	18	17	20	15	24	22
(5)博愛の故に						1	1			8	2		2		2	3	1	3
(6)とることを是認するもの	2	3	3	2	4	3												

表(4)　結果論的判断から動機論的判断への年齢的変化



（1，2，3，4，5 より構成）

＊は，結果が等しいときの動機論的判断

(1)　古市裕一　1979「道徳判断の発達と学習」

(2)　栗原　弘　1962「児童の道徳判断の発達に関する研究」

(3)　牧下末彦・坂上登四郎　1947「児童の道徳意識の発達について」

(4)　水野茂一　1964「現代の子どもの道徳判断の段階的発達」

(5)　柴田　薫　1975「道徳的判断の発達的推移に関する検討」

（「児童心理学ハンドブック」，金子書房，昭和58年）

しかし私はここにおいても断定的に論じられることは警戒すべきだと思う。「結果論から動機論への年齢的変化」表(4) をみると，幼児の終わり5，6才ごろがその変化の表われる時期となっている。また，虚言に関しての調査で，ピアジェの研究では，主観的動機論的判断をする者は10才という平均を出しているが，成田公一氏の研究 表(5)から，沢田慶輔氏は，「7才児で主観的動機論的判断をする者が圧倒的に多い」注(22) という結論を出してもいる。こうしたことから推察すると，動機論への移行は，幼児の環境，特に大人の幼児の行為に対する対処の仕方が影響しているように思う。

表(5)　虚言に関する話の判断(%)　(成田公一)

学　年	1	2	3	4	5	6
動機論的	63.3	76.7	76.9	72.7	77.9	71.8
結果論的	13.3	10.0	12.0	5.3	3.9	2.0
両方悪い	6.7	10.0	7.4	21.3	16.4	25.0
無　　答	16.7	3.3	3.7	0.6	1.3	0.9

コールバーグは，大人の判断にただ頼り，褒められることのみを求めて行動する時期を幼児の道徳性の発達段階の第1水準とし，この時期を経過した後，よい子イメージを手がかりに行動する第2水準の時期へ入ってゆくと述べている注(23)。各々の生活環境や素質により，それは何才からと一概に論じられるものではないが，結果論を動機論に変える時期が，大体このころにあることはまちがいない。そしてこの変化の時期の遅速が，幼児の精神的発達にあるのは当然だが，一方，親の指導方針で大きく左右されるものと考えられるのである。

たとえば，物をもらって「ありがとう」とは必ずいうが，その物を放り出すような子がいたとする。また，「ありがとう」といわず「おおきに」という子に対して，それはまちがいだとか，おかしいとか強引に主張する子がいたとしたら，それは子どもの性格もさることながら，親の指導も係っているのではあるまいか。つまり，型はしつけても，型の背後にある心を教えていない結果といえよう。臨機応変ということを，幼児に望むのは無理かもしれないが，親が，心が型となり，型は心とならねばならぬという道徳の本質に目を向けていれば，型へのこだわりは子どもからも徐々に失われるはずである。「しつけ」は，民族のもつ文化様式を理くつぬきで教えこむことが主になると思うが，少なくとも親自身は，その「心」をおきざりにしてはならない。特に，所により千差万別の「型」を示す礼儀の場合，「心」をぬきにした型の「しつけ」は当然片手落ちといえる。また，現実生活は時と場合によりさまざまな事情が入り組んでいるから，徐々に社会生活に入ってゆく幼児にも，一つの型の固執ではすまない事態が多々出てくる。それに対応する意味でも，動機論への移行は意図的になされなければならないだろう。

考えてみると，幼児はその情緒性から推しても，決して公式一点張りではなくむしろ応用型なのである。型よりもむしろ動機によって行動が支配されている。そのため，たとえ動機は善であったとしても，好ましからざる結果を生じて親たちを困らせることも多いのである。が，

この場合，親はどう対処するだろうか。幼児の善意を汲んだ上で困った結果を導いた方法の誤りを教える親，結果をみて激昂し体罰に直行する親，その事態により同じ親でも反応はさまざまかもしれない。しかし，少なくとも冷静さをとり戻したあとにおいてさえ，そうした結果をひきおこした幼児の動機に対し注目し助言することを怠ったとしたら，せっかくの道徳的育成の機会を，みすみすとり逃してしまうことだろう。こうした機会こそ，道徳の本質に触れ，もしその動機が純粋であったならば，それを是認することによって子どもは動機を大切にしようとする心を強めるのである。それが自律的な道徳への入口を開くことになるのである。

道徳性の萌芽期として幼児を注目する時，幼児には本来的な善の芽がいくつも潜んでいることに気づかされる。たとえば，幼児期の心理の特徴である「自己中心性」はともすれば自分本位な行動として取り扱われ易いが，レンパースは次のような立証でこの自己中心性さえ否定した。彼の実験によると，「1才半から3才までの幼児は，大人に絵やおもちゃを示すのに，大人の側を表にし，何も書いていない裏側を自分がみる，という動作をする。これは年齢の低い子でさえ結果は同じであった」注(24)という。また，フラヴェルも最近，「就学前児は自分が目を閉じると他人もまた自分が見えなくなると考える，という俗説を否定，自己中心性をくつがえした」注(25)。確かに経験の乏しい幼児が自他を混同することはよくあることだが，それにより幼児はすべて自己中心的であるというのはどうであろう。幼児がごっこ遊びをしている様子もそれを証明する。幼児は想像の世界に浸って演技することがうまい。しかし，それは想像と現実を混同しているのではなく，役割取得ができるほど他者への観察眼ができているのである。当然どこまでがほんとうの現実で，どこからがうその遊びだということを，かなり明確に意識しているのである。だからこそ，他人に見られるのを好まないのである。これによっても自己中心性は否定されるだろう。

さらに今日，入園児の低年齢化は，社会性を発達させ，幼児の未分化から分化への移行を早めているように思う。自他の差，生物・無生物のちがい等は比較的早く弁別できるようになっているのではないだろうか。にもかかわらず，他の子が泣くと一緒に泣き出すといった幼児の現象は，自己中心性というより，むしろ，他人への共感性の深さを示していると思う。心情に訴える道徳性育成を考える場合，この共感性こそ着目すべきことであろう。

共感性は，愛他心に通じる意味で，道徳心の根幹ともいえる。幼児が転んだ子や苦しむ人をみてわがことのように涙を流す心は，孟子のいう「惻隠の情」に通じる心であり人間性に本来的な善の芽があることを確信させる。幼児はその共感性の豊かさ故に，動植物でも人間と同じような心を持っていると考える。この擬人化はアニミズムとよばれるが，これは生き物や他者に接する一番大切な感情として無下に退けられるべきではない。まして大人の多忙さ故に，こうした情緒性を理窟で否定することは，せっかくの道徳心の萌芽を摘みとることにもなりかねない。「子どもは大人の父である」というワズワースの詩のように，大人に優る幼児の共感性の豊かさを，むしろ大人の方が幼児から学びとる心が必要である。

愛他心を意図的に伸ばすには，年下の子どもの世話，老人の相手，小動物の飼育，植物の栽

培など，愛情の対象を持たせることもよいであろうが，何よりも中心となるのは，生活の大部分を占める遊びの中での育成である。3才頃までの家庭中心のひとりあそびは，近隣の子たちとの平行あそびを経て，4，5才になると俄然子ども同志の戸外におけるグループ遊びに変ってゆく。そこでは，所有の侵害，身体的攻撃など子ども同志の喧嘩も熾烈であるが，それを通して幼児は，他人がそれぞれの内的状態を持つことを知り，共感性を通して自制心の必要を納得するのである。

今日，日本では二人っ子と一人っ子が三分の二を占めるといわれ，兄弟姉妹の交流が少ないが，その分，在籍率93%表(6) 注(26) に及ぶといわれる保育所や幼稚園によって，子ども同志の交流が補われている。こうした生活空間の広がりに伴い，それまで親の支配下で他律的な道徳に励んでいた幼児は，子供社会の中での役割を通して自己の内面の力を信じ，自律的な道徳に目覚めてゆくのである。役割あそびの中で，正義の味方が大活躍するのも，道徳的基準が徐々に幼児の心情の中で育ちつつあるということだろう。この生き生きした遊びの現場で，自発的な道徳的諸現象を捉えて善導する親や保育者の役目は，非常に重要な意味をもってくるのである。

表(6)　幼稚園と保育所在籍者の年齢別在籍率

区　分		計	幼稚園	保育所
			(　)は59年	
3歳	昭和40年	8.5%	2.9%	5.6%
	昭和50年	25.0%	6.5%	18.5%
	昭和54年	32.9%	8.4%	24.5%
	昭和57年	37.6%	11.4(12.2)%	26.2%
4歳	昭和40年	34.2%	24.9%	10.3%
	昭和50年	72.3%	48.6%	23.7%
	昭和54年	79.0%	50.9%	28.1%
	昭和57年	81.5%	51.5(52.4)%	30.4%
5歳	昭和40年	61.9%	43.7%	18.2%
	昭和50年	87.1%	64.2%	22.9%
	昭和54年	90.0%	65.7%	24.2%
	昭和57年	93.0%	64.0(63.9)%	29.0%

(「学校基本調査」文部省，「国勢調査」総務庁，「社会福祉調査」厚生省)

4.　他律道徳から自律道徳へ

自律的な道徳性の萌芽は，良心の芽生えであり，それは罪の意識の始まりでもあろうか。ホフマンによれば，「罪の意識が出現するのは，6才ごろであるが，その萌芽はすでに2才児にみ

られる」注(27)という。このように早い罪の意識の芽生えは人間に本来的に備わっている良心の存在を確信させる。

良心は自分を監督するもう一つの心の目である。欲求のままに善の基準から逸脱しようとする自分を監督し責める心が罪の意識といおうか。自他さえ未分化といわれる幼児に，このような意識がすすんでいることは不思議でならない。しかし，あまりにも枠付けされた中で従順に育てられている子をみると，善からの逸脱も少ないかわりに罪の意識の芽生えるチャンスもない。そのため，自律の心が芽生えてこない。また，あまりにも親が間断なく指示や賞罰を連発していると，自分の意志で自分を見つめるという自律の心の育つ機会が奪われ，やはり罪の意識の芽生えは遅いようだ。恵まれすぎた状況が必ずしも人格形成に最適とはいえず，悪への逸脱による心の葛藤が時には良心を目覚ます結果となるのは皮肉な現象である。

ともあれ，このような自律性の芽生えは，幼児の道徳性の成長を示すものである。いかに知能の発達が顕著であろうと，人間らしさの欠けた成長は，本人にとっても社会にとっても不幸なことであろう。そして現在，そうした道徳性の欠如した成人が決して皆無ではないということは，幼児期の指導に深く反省させられるところが多いのである。成長し，枝葉を広げてからではとりかえしがつかない。「根を養えば，樹は自ら育つ」というように，根に当たる幼児期こそ，人間らしい人格を育む養分を与えることが大切なのである。

幼児はその情緒性で，親の心を空気のように吸収し，それを糧として，日々精神的成長をしている。とすると，道徳性の育成は，時代を超えて，親の精神性と不可分なものであろう。やはり，ランゲフェルトいう所の，「たとえ不器用でも暖く分別ある自制的な世話」以外にないのではなかろうか。家庭における人間的信頼関係，それが何にもまして自律的な道徳へ導くバネになると思うのである。人格形成の基盤となる三つ子の魂だけは，やはりその後の人生の風雪に耐え得るような信愛に満ちた土壌で養われることを切望するのみである。

（本学助教授＝道徳教育・心理学担当）

注

（1） 鈴木　清：「学童期における道徳意識の発達」p.41～3　光風出版　昭和30（1955）
（2） ゲゼル　生月雅子訳：「狼に育てられた子」家政教育社　昭和42（1967）
（3） 和田修二：「子どもの人間学」p.127　教育学大全集22　第一法規出版　昭和57（1982）
（4） 小島　潔：「幼児の情緒の発達」p.67　幼児心理学　中央幼児教育研究会　昭和42（1967）
（5） 山下俊郎：「幼児心理学」p.215　朝倉書店　新版　昭和51（1976）
（6） 時実利彦：「人間であること」p.28　岩波書店　昭和59（1984）
（7） Carey, S. : "The child as word learner" in M. Halle, J. Bresnan, & G. A. Miller (Eds.) : Linguistic theory and psychological reality. Cambridge (Mass.), Massachusetts lnstitute of Technology Press, 1978.
（8） 山下俊郎：上掲書　序論　p.9
（9） 山下俊郎：上掲書　p.384

(10) Piaget, J : "Le langage et la pensée chez l'enfant" 1923. 大伴茂訳「児童の自己中心性」昭和45 (1970), 第1, 2, 3, 4章

(11) 山下俊郎：上掲書 p. 372

(12) 平井信義：児童相談3 p. 208 新曜社 昭和55 (1980)

(13) 詫摩武俊・飯島婦佐子編：「発達心理学の展開」p. 223 新曜社 昭和57 (1982)

(14) Spitz, R.A. : "Hospitalisumus" in Bittner, G. (Hrsg) : Erziehung in früher kindheit. München, R. Piper, 1968. 古賀行義訳「母子関係の成り立ち」同文書院 昭和46 (1971)

(15) Langeveld : "Autrißeiner Entwicklungs psychologie" in Studien zur Anthropologie des Kindes. S. 79

(16) 小島謙四郎：「母子関係と子どもの性格」 p. 69 川島書店 昭和55 (1980)

(17) 佐野 豪：「遊べない子は育たない」p. 138 文化出版局 昭和53 (1978)

(18) 畠瀬直子：道徳性の発達「道徳教育」p. 36 有信堂 昭和58 (1983)

(19) 箕原 実：「しつけの児童心理」p. 328 洋々社 昭和58 (1983)

(20) 山下俊郎著：上掲書 p. 357

(21) 安田 実：「児童の道徳的判断(2)」p. 303 教育心理学研究 14—4 昭和14 (1939)

(22) 沢田慶輔：道徳性の発達「児童心理学ハンドブック」p. 360 金子書房 昭和40 (1965)

(23) 畠瀬直子：コールバーグによる道徳性の発達段階「道徳教育」p. 38 有信堂 昭和58 (1983)

(24) Lempers, J.D., Flavell, E.R., & Flavell, J.H. : "The development in very young chidren of tacit knowledge concerning visual perception" in Genetic Psychology Monographs, 95. 1977 p. 3—53

(25) Flavell, J.H., Shipstead, S.G., & Croft, K. : "What young children think you see when their eyes are closed" Unpulished manuscript. Stanford University, 1978.

(26) 文部省：「現代の家庭教育 乳幼児期編」表35 昭和59 (1984)

(27) ホフマン, M. L. 依田明・宮前理訳：「道徳性の発達」情緒と対人関係の発達 p. 109 金子書房 昭和56 (1981)